

＜特色と概要＞

大阪府内泉州南部圏域でのハイリスク妊娠・分娩及び新生児診療を支える泉州広域母子医療センターにおける新生児医療センターの役割は、NICU(neonatal intensive care unit)・GCU(growing care unit)管理運営、ハイリスク分娩立会い、正常新生児診療及び母児愛着関係支援である。

当センター産婦人科においては産婦人科診療相互援助システム(OGCS)、小児科においては新生児診療相互援助システム(NMCS)に参加し、泉州南部圏域周産期医療の活動拠点となっている。NICU入室基準は、在胎26週以上かつ出生体重500g以上としているが、新生児診療に精通した医師の充足は非常に重要な課題である。また、早産児診療に必須の眼科診療は、当センター眼科常勤医師が2016年3月末に退職後、和歌山県立医科大学眼科学教室に応援医師派遣を依頼、NICU往診、必要時にはROPに対してNICU病棟内でのレーザー光凝固術や手術室での抗VEGF薬硝子体内注射を施行依頼している。ROP診療に精通した眼科常勤医師確保もまた、重要課題の一つである。

2025年度NICU診療スタッフは、新規採用の常勤医1名を加え、常勤医3名、専攻医1名の4名で運営開始(他の常勤医1名及び非常勤医2名は外来専従)となり、わずかに人員増加するも大幅な欠員のままである。当院では2017年度より宿日直業務から日勤夜勤交代制導入となっていたが、2024年度より導入となった罰則付きの医師の働き方改革に対して、マンパワー不足によりNICU夜勤担当者を翌日日中業務に組み込まざるを得ないことから、時間外労働時間上限に関して、A水準指定(時間外労働年間960時間)ではなくB水準指定(時間外労働年間1,860時間)とし、宿日直許可を申請承認された。NICU入室基準を制限せず、少ない人員で何とか運営可能であったが、従来の新生児特定集中治療室管理料1(10,584点)取得は認められなくなり、管理料2(8,472点)取得に引き下げられ、NICU入院児の減少と相まって、収益面で大きな損失となった。

＜実績＞

NICUの入院統計を表1に示す。2009年9月に泉州広域母子医療センター開設後、入院数は概ね100人前後を維持してきたが、コロナ禍中の2021年度84人、2022年度80人と減少傾向が続いたため、NICU入院基準を、2022年度より在胎35週未満又は出生体重1,800g未満から、在胎36週未満又は出生体重2,000g未満に拡大したところ、2023年度91

人、2024年度89人とやや増加に転じていたが、今年度は85人と再び減少、従前に回復するには至っていない。当院産科及び近隣産科医院の分娩数減少を背景に、大阪府下のNICU施設による入院症例獲得競争が進行している影響と思われる。

早産低出生体重入院の内訳として、極低出生体重児は8人(9.4%)、うち超低出生体重児は3人(3.5%)と緩やかに減少している。近年のNMCS参加施設入院実績と一致し、泉州医療圏でも超早産児が減少する傾向が継続している。

母体搬送後に出生後NICU入院となった児は、院内出生63人中4人(6.3%)と、2023年度18.7%、2024年度3.4%より著しく減少したままで、NICU診療対象児出生が見込まれる妊婦を早期に母体搬送という形で適切に地域医療機関に配分するOGCS機能は果たされているとは言えない。

NMCS基幹施設による新生児搬送入院数は、2023年度17人(18.7%)、2024年度14人(15.7%)と近年15～20%で推移していたが、今年度は22人(25.6%)と増加しており、当周産期センターへの搬送時期は、出生前母体搬送から出生後新生児搬送にシフトした。

入院症例の呼吸管理は、人工換気療法(IPPV)は9人(10.6%)、呼吸補助装置(N-CPAP又はHFNC)は33人(38.8%)に施行した。

表1. NICU入院数 (2025.4～2026.3)

出生体重(g)	院内出生	院外出生	計	IPPV	nCPAP and/or HFNC
<1000	3	0	3	2	1
<1500	5	0	5	1	2
<2500	38	6	44	5	14
≧2500	17	16	33	1	16
計	63	22	85	9	33
在胎期間(週)	院内出生	院外出生	計	IPPV	CPAP and/or HFNC
<28	0	0	0	0	0
<30	3	0	3	3	0
<32	1	0	1	0	1
<34	9	0	9	1	2
<37	31	4	35	4	22
≧37	19	18	37	1	8
計	63	22	85	9	33

＜今年度の成果と来年度への抱負＞

本邦では、2016年に初めて出生数が100万人を下回って以降、年々減少の一途を辿り、2022年には初の80万人割れとなった。少子化の影響は、周産期医療の現場でもNICU入院数減少という直接的な形で押し寄せている。今後も、泉州南部地域唯一のNICU施設として、小児科医師及び看護スタッフなどのマンパワーを充実させ、やりがいのある職場環境を構築することで、地域の新生児及びその家族へ質の高い医療を提供することが必須である。